

成人看護学領域における教育活動

— 成人看護学演習の授業展開 —

高橋直美¹⁾ 岩崎淳子¹⁾ 北端恵子¹⁾ 林 久美子¹⁾

I. はじめに

本学の成人看護学における科目は、成人看護学概論 1 単位、成人看護学援助論 I（急性期）2 単位、成人看護学援助論 II（慢性期）2 単位、成人看護学演習 1 単位、成人看護学実習 I（急性期）3 単位、成人看護学実習 II（慢性期）3 単位で構成する。成人期は人生のうち最も長い時期であり、青年期から向老期に至るまでと期間が長い。何らかの疾病をもちながら社会生活を営み、病気をコントロールしながら生活をしている人を対象にしている。そのため学生が臨地実習で体験する急性期にある患者や慢性期にある患者の看護については、発達段階を考慮し、病態を理解したうえで、治療過程における看護を学んでいる。苦痛の緩和、患者の生活背景をふまえた退院後の生活の立て直しや症状の管理、その家族の援助など多様性が求められる。

成人看護学演習は 3 年前期、実習前の科目として位置づけ、これまで学んだ成人看護学の知識をもとに、事例を通して看護過程の展開と急性期及び慢性期における看護技術の実践を行う。事例で提示された患者の病態を理解し、看護問題の抽出と優先度を決定し、看護計画を立案する。その看護計画をもとに、根拠に基づいた援助を患者役に配慮しながら実践する。また、成人看護学実習へのスムーズな移行もねらいとしたものである。

II. 成人看護学演習の概要と目的および到達目標

1. 科目の概要

急性期、慢性期の状態にある成人の身体面、心理社会面、精神面の特徴や家族を含めた課題やニーズを理解し、チーム医療、在宅との連携、日常生活の課題などについて、紙面上の事例を通して看護過程を展開し、課題解決に必要な情報収集、アセスメントと看護計画の立案などの看護援助を学ぶ。また、急性期、慢性期にある成人の看護に必要な看護技術を習得するために、事前学習を踏まえ、患者の安全、安楽、清潔などに留意した技術の演習を実施する。

2. 成人看護学演習の講義目的

成人期における疾病の治療や援助に伴う看護技術の習得および健康障害によって生じる対象者の反応についてアセスメント能力と問題解決能力を修得する。

3. 到達目標

- 1) 急性期、慢性期の事例を通して、課題解決に必要な情報を抽出できる。
- 2) 急性期、慢性期の事例を通して、抽出した情報から適切なアセスメントができる。
- 3) 急性期、慢性期の事例を通して、個別性を踏まえた看護計画を立案できる。
- 4) 看護過程を展開する中で、急性期、慢性期にある人の生命の維持と日常生活機能の回復、生活の再構築について説明できる。
- 5) 急性期にある対象者に必要な援助について、モデルを使用し具体的な方法について理解できる。

1) 朝日大学保健医療学部看護学科（成人看護学）

6) 慢性期にある対象者に必要な援助について、体験・技術の習得を通して理解できる。

Ⅲ. 実施内容

1. シラバスとその概要

成人看護学演習(1単位 30時間)の開講は3年生前期(4月7日～6月16日)に実施した。学生数は84名、担当教員3名であった。シラバスは表1の通りである。

表1 成人看護学演習シラバス

回数	内容
1	科目オリエンテーション、課題提示(事前学習)
2	課題提示(急性期事例)と記録用紙の説明、アセスメント
3	アセスメント
4	看護計画立案
5	看護計画発表
6	討議
7・8	急性期看護の援助技術
9	課題提示(慢性期事例)、アセスメント
10	アセスメント
11	看護計画立案
12	看護計画発表
13	討議
14・15	慢性期看護の援助技術

シラバスには、準備学習について「成人看護学概論，成人看護学援助論Ⅰ・Ⅱや臨床病態学を系統的に予習・復習しておきましょう」と記載した。そこで第1回の科目ガイダンスの時に学習課題を提示した。急性期事例と慢性期事例の疾患について、病態・検査・診断・治療・看護についてまとめることとした。また看護理論や患者の心理について自己学習を促した。課題は期日を設け提出させ確認後返却し、看護過程の展開に活かせるようにした。

成人看護学演習での学習は、事例患者を通してヘンダーソンのニード論を用い、看護問題を明確にして解決する看護過程の展開を行う問題解決型の学習とした。

2. 事例患者の看護過程展開

1) 急性期看護における看護過程の展開

急性期看護における看護過程は、胃がん患者、乳がん患者、肺がん患者、大腸がん患者の事例を用いて周手術期における看護を展開した。第2回目から第5回目までをグループワークとし、学生を1グループ10名から11名で8グループ編成し、教員は複数のグループ間を巡回することにした。第6回目は、グループで作成した看護過程を全体で発表し討議をした。最後に教員3名からのコメントや修正などの指導により全体に周知できるようにした。事例の概略は以下のとおりである。

<急性期患者の事例>

Bさん、58歳男性。会社員。4人家族。1年前の検診で便潜血陽性の指摘を受けたが仕事が忙しく放置していた。1カ月前より倦怠感が強く、その後下血し検査の結果直腸がんと診断され、腹会陰式直腸切

除術，人工肛門造設術手術予定で入院した。

周手術期では①手術当日②手術後1日～3日③4日～5日④6日以降の経過を示した。

2) 慢性期看護における看護過程の展開

慢性期看護における看護過程は，心不全患者，糖尿病患者，脳梗塞患者，慢性腎症患の事例を用いた。第9回から12回は看護過程展開を個人で，できるようになるために看護計画の立案までを，グループ単位ではなく一人または数人で行い事例が重ならないよう振り分けた。助言する教員はできるだけ個別の対応ができる体制とした。第13回は4事例を組み合わせた8グループを編成し，グループ内で討議をした。各教員はそれぞれのグループを順に入り，4つの事例患者の看護について検討したことを共有できるよう助言した。事例患者の概略および記録用紙についての紹介は次の通りである。

<慢性期患者の事例>

Dさん，54歳男性。高血圧の既往あり。20年前糖尿病を指摘され40歳ころから内服治療中。48歳よりインシュリン療法を開始した。その後，飲酒や食事制限が守れておらずHbA1c9.4%で経過。血糖コントロールの目的で入院となる。入院後の食事指導の内容，患者の自覚症状や病気に対する捉え方，検査結果などを情報として示した。

3. 記録用紙

記録用紙は，3年生後期に成人看護学実習で用いるものを使用した。学生が実習で各記録へつなげることができるようにした。記録の種類は，受け持ち患者のプロフィール，アセスメントシート1（常在条件・病的条件），アセスメントシート2（情報の分析・看護問題の明確化），フローシート，受け持ち患者の全体像（関連図），看護問題シート，看護計画とした。

4. 技術演習

技術演習では，考え行動できることを重視したため学習参加型の教育方法を，取り入れた。学生主体の技術演習の動機付けとしてと，気管内吸引，人工肛門造設時のケア，輸液管理，自己血糖測定法について，方法と留意点について課題を出した。その課題レポートの作成を指示し，そのレポートを参考にグループ内でデモンストレーションすることを伝えた。

<急性期看護技術>

第7回～第8回の急性期における看護技術は，事例患者の看護計画の実施になるよう肺がん患者の事例から気管内吸引のケアが導き出せるように設定した。1教室で1名の教員が担当した。

学生は気管内挿管をされた患者を初めて見るので，吸引シミュレーター「Qちゃん」（京都科学）で事前に気道の解剖と，気管内チューブや気管内への吸引カテーテル挿入の仕組みをとらえるような学習コー

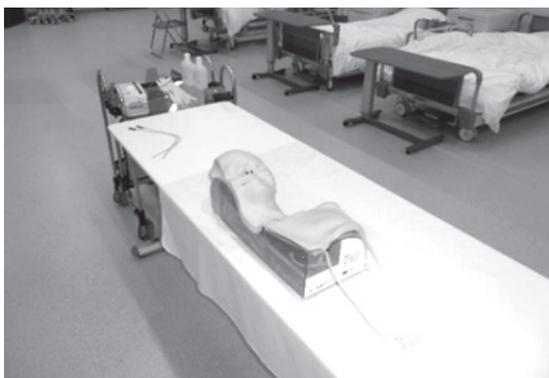


写真1 「Qちゃん」コーナー



写真2 準備する学生



写真3 気管内吸引 患者A子さん



写真4 気管内吸引 患者B男さん

ナーを設け（写真1）解説した。気管内吸引では写真3、4の通り、挿管チューブを固定された模擬患者を作成し、グループの一人がデモンストレーションする。実施の途中でやり方がわからなくなり戸惑った時は同じグループのメンバーがアドバイスするようにした。困っている場面では教員がサポートした。

気管内吸引の技術演習は講義予定時間の中では全員が体験できないものもあったため、後日演習の時間を4時間程度設けた。授業と同様の設定を行い時間にゆとりをもって設定したこともあって、学生は一つ一つの技術を確認しながら実施できていた。

もう一方の教室では、2名の教員が人工肛門造設患者のケアを担当した。主にモデル人形を使用した。希望する学生には作成したストーマを両面テープで腹部に接着させ、パウチ交換や洗浄を行った。

<慢性期看護技術>

第14回第15回慢性期における看護技術は、心不全患者の事例から、輸液ポンプやシリンジポンプを含む輸液管理が導き出せるように設定し2名の教員で担当した。もう一方は、糖尿病患者の事例から自己血糖測定の指導について1名の教員が担当し実施した。輸液の管理については、グループ全員が輸液の滴下計算ができるよう互いに教えあい、実際に滴下数の調整を行った。自己血糖測定については血液を扱うため細心の注意を払い、希望する学生には教員が確認し実施した。欠席者など数名を除く学生が自己血糖測定を実施できた。

5. 学生の取り組み

学生はこれまで与えられた資料に目を通し、示された手順でそれを覚える学習方法に慣れているようで、自分で調べてきたことを他の学生の前で実施することを嫌がる学生もいた。また実施中から実施後に教員に助言を受けたことを知識の確認ができたととらえる学生が多かった。その反面初めから教員が教えることを望む学生もおり、主体的に学ぶ姿勢を養う必要性があった。

IV. 技術演習から見た課題

1. 急性期では事例ががん患者に偏り、周手術期の看護はとらえられたが、がん患者以外の急性期の看護についてイメージできにくいものになった。
2. 技術演習時の様子から、事前学習や課題への取り組みが不十分な学生や演習中も消極的な学生がいることでグループ間において学びの差が生じた。
3. 事前に課題を行い、学生が主体的に技術を習得することで、学習意欲が高まった。しかし、個別の指導に時間がかかり、授業時間内に全員が終えられなかった。

4. 演習終了時にカンファレンスの機会が持てなかったことから、全体へ技術や倫理的配慮についてのフィードバックができなかった。

V. おわりに

問題解決能力や主体的に学ぶ姿勢を養うためには、動機づけと環境作りが重要である。学生のリアクションペーパーには「アセスメントがわかって良い学びができた」「看護計画がわかった」「清潔不潔のポイントがわかった」などの意見があった。授業評価では演習全体の評価として「新しい知識・技術が得られた」4.50点（5点評価中）「総合的にこの演習を受けてよかった」4.40点（5点評価中）であった。

今回、成人看護学演習の教育活動を振り返ることで、新たな課題も明確になった為今後に活かしていきたい。

文 献

- 林美奈子，竹内久美子，伊藤ももこ，石光芙美子，口元志帆子（2008）：成人看護学領域における看護技術教育の検討 ― 過去 10 年間の成人看護学演習の動向から ―. 目白大学 健康科学研究, 第 1 号, 129-138
- 川村雅文（2012）：系統看護学講座 専門分野Ⅱ 呼吸器 成人看護学②：医学書院
- 中山亜弓，逸見英枝，小野晴子，金山弘代，掛屋純子，柘野浩子（2010）：成人看護学実習に向けての事前学習および学内演習の効果. 新見公立大学紀要, 第 31 巻, 139-145.
- 大西和子（監）（1014）：事例で学ぶ看護過程 PAPT1：学研
- 島田千恵子，小元まき子（2002）脳梗塞患者の看護. 神谷光男（編）：ナーシングカレッジ 2002 年 6 月別冊 第 6 巻第 11 号 通関 75 号 疾患理解とケアプランのための看護過程セミナー：医学芸術社，
- Virginia A.Henderson（1960） / 湯槇ます，小玉香津子訳（2014）. 看護の基本となるもの：日本看護協会出版会